

英語語法文法学会 第 33 回大会資料

日 時： 2025 年 10 月 11 日（土）

開 催 校： 京都外国語大学

住 所： 〒615-8558
京都市右京区西院笠目町 6
(<https://www.kufs.ac.jp/access/index.html/>)

順路：

- 阪急京都線利用の場合は、「西院」駅から西へ徒歩約 15 分。
または市バス「西大路四条」（西院）から 3・8・25・28・29・53・67・69・71 系統に
乗車、「京都外大前」で下車。（所要乗車時間約 5 分）「大阪梅田」駅から「西院」駅まで
は約 40 分。
- JR 線利用の場合は、「京都」駅烏丸口から市バス 28 系統、八条口から市バス 71 系統に
乗車、「京都外大前」で下車。（ともに所要乗車時間約 30 分）

英語語法文法学会

The Society of English Grammar and Usage

September 2025

英語語法文法学会 第 33 回大会プログラム

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,000 円 学生 1,000 円

日 時：2025 年 10 月 11 日（土）

<大学の食堂は利用できませんが、近隣に京都ファミリー（イオン系列）やコンビニ、飲食店があります>

開 催 校：京都外国語大学

住 所：〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6
(<https://www.kufs.ac.jp/access/index.html/>)

開 催 校 委 員：吉川裕介、大野直樹

大会実行委員：山岡洋（委員長）、出水孝典（副委員長）、住吉誠、中澤和夫、
吉田幸治

- 司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控え室
(1 号館 4 階 145 教室)
- 大会本部・運営委員会室（1 号館 4 階 144 教室）
- 一般休憩室（1 号館 4 階 142 教室）
- 書籍展示（1 号館 4 階 学生ラウンジ）

受 付：10 時 00 分より 1 号館 4 階 141 教室前

ワークショップ（1 号館 4 階 141 教室） 10:40 – 11:40

司 会 大澤舞（獨協大学）

1. 「動詞 buzz の多義性」…………… 富依慎也（神戸学院大学学部生）
2. 「アメリカ英語における albeit の補部の歴史的変遷—COHA の用例分析から—」
…………… 井上徹（成城大学）
3. 「英文和訳で訳されない but と和文英訳で補われる but」…………… 田岡育恵（大阪工業大学）

受付：12時30分より 1号館4階141教室前

研究発表 13.00 – 14.45

第1室 (1号館4階141教室)

司会 西山淳子 (和歌山大学)

1. 「Will you 構文と Can you 構文の表す依頼内容の差異について—please と共起した例に注目して—」 宇都陽鳳 (大阪大学大学院)
2. 「関係詞節における認知的 will について」 岡麟太郎 (日本大学)
3. 「Used to の「推意キャンセル」と進行形可否に見られる整合性」 ... 島本慎一郎 (日本大学)

第2室 (1号館5階151教室)

司会 徳永和博 (東京農業大学)

1. 「動名詞構文における動作主の意図性」 加藤翔太 (筑波大学大学院)
2. 「談話標識の新奇表現 in long の語法」 木村快 (慶應義塾大学大学院)
3. 「不定詞を補文にとる使役表現とその補文内部における完了形・進行形の出現について」 村岡宗一郎 (日本大学)

総会 (1号館4階141教室) 15.00 – 15.20

総会司会	五十嵐海理 (龍谷大学)
開会の辞	会長 吉良文孝 (日本大学)
学会賞・奨励賞選考報告	会長 吉良文孝 (日本大学)
事務局報告	事務局長 松原史典 (京都女子大学)
会計報告	会計 小澤賢司 (日本大学)

シンポジウム (1号館4階141教室) 15.35 – 17.45

テーマ「英語へのコンストラクション (構文) 的アプローチ」

司会 前川貴史 (龍谷大学)

1. 「不定冠詞と複数形名詞が会うとき」 前川貴史 (龍谷大学)
2. 「ネットワークを用いた構文分析—BE V-en INF 構文を例に—」 町田章 (日本大学)
3. 「“So, look, I mean, you know, the fact is, is that ...” —語用論標識の連鎖と語法について—」 柴崎礼士郎 (明治大学)
4. 「談話構文としての数・量推移構文」 村尾治彦 (熊本県立大学)

閉会の辞 吉川裕介 (京都外国語大学)

懇親会 18.00 – 19.30 **会場**：南迎賓スペース (4号館6階)
(懇親会費：一般 5,000 円 学生 3,000 円)

ワークショップ (1 号館 4 階 141 教室) 10.40 – 11.40

司会 大澤舞 (獨協大学)

動詞 buzz の多義性

富依慎也 (神戸学院大学学部生)

本発表では英語小説から収集した事例に基づき、動詞 buzz の意味拡張がどのようなものであるかを明らかにする。具体的には、動詞 buzz はもともと「虫の羽音」を表していたが、今日ではそこからメトニミー的に拡張された、(1) のような「人がブザーを鳴らす行為」が、中心的な語義となっていることを提示する。

- (1) a. Kate Erling buzzed. "I'm sorry, Miss Roffe. Sir Alec's out of the office."

(Sidney Sheldon, *Bloodline* : 211)

- b. The secretary buzzed to say Harris was waiting for me. (Warren Kiefer, *The Lingala Code* : 138)

さらに、動詞 buzz のそれぞれの意味におけるインフォーマント調査による for/in 句の判別テストの結果を示し、Vendler(1957) などの語彙アスペクト分類では基本的に「活動」(Activity) であるものの、所要時間を表す in 句の容認度が高くなる場合とその理由を明らかにする。

アメリカ英語における albeit の補部の歴史的変遷—COHA の用例分析から

井上徹 (成城大学)

これまで、譲歩を表す albeit の用法は一部で論じられてきたが、補部構造に焦点を当てた通時的な研究は十分には行われてこなかった。本発表は、albeit の補部構造の歴史的変遷をアメリカ英語において明らかにすることを目的とする。

資料は *The Corpus of Historical American English* (COHA, 1820–2019) に収録された約 1900 例である。albeit の使用頻度の推移を見ると、1880 年代に一時的に増加が見られ、その後は起伏はあるものの全体としては 1970 年代までは大きな変化はなかった。1970 年代以降は増加に転じ、1980 年代以降は顕著な増加傾向を示す。

補部は大きく節 (albeit that 節・that を欠く節・非定形節) と句 (名詞句・形容詞句・副詞句・前置詞句) の二つに分類した。その結果、20 世紀初頭までは節を伴う用法が優勢であったが、以後は句を伴う用法が増加し、全体として句が主流となっていくことが確認された。

本発表では、これら補部タイプの分布の変化を形態的・意味的観点から考察し、albeit の発達を英語における表現と構文の歴史的変化の一端として位置づける。

英文和訳で訳されない but と和文英訳で補われる but

田岡育恵（大阪工業大学）

尾野（2018）は、日本語が「場面内視点」であることから、but が和訳では譲歩表現で訳されない例、また、日本語原文には譲歩表現がないのに、その英訳で but が補われる例を挙げている。これは、田岡（2025）で、原文の英語には譲歩表現がないのに、その和訳では、「けれども」や「しかし」等の譲歩表現が補われることが多いと主張した、その逆の見解になる。そこで、今回の発表では、田岡（2025）とは逆のアプローチで、but が日本語の譲歩表現で訳されていない場合、そして、日本語原文に譲歩表現がないのに英訳で but が用いられている場合について、Agatha Christie の *Hercule Poirot's Christmas* とその翻訳『ポワロのクリスマス』（村上啓夫訳、川副智子訳）、川端康成『雪国』とその翻訳 *Snow Country* (E. G. Seidensticker 訳) からの例で考察する。それらの例の中には、but が用いられているが、文脈に明白な譲歩関係が認められず、but を日本語の譲歩表現で訳すことはできないと思われる場合がある。また、逆に、明白な譲歩関係が考えられない文脈で、日本語では譲歩表現の使用は考えられないのに、英訳で but が用いられているという場合がある。そのような but は、一体、どのようなものなのか。その観察から、but と日本語の譲歩表現の相違点、共通点を考える。

司会 西山淳子 (和歌山大学)

Will you 構文と Can you 構文の表す依頼内容の差異について
—please と共起した例に注目して—

宇都陽鳳 (大阪大学大学院)

英語の慣習的な依頼表現としてよく知られているものに Will you 構文と Can you 構文がある。両構文は、久野・高見 (2022) が (1) で示したように、表される依頼内容によって自然性が揺らぐことが指摘されている。

(1) Will/#Can you marry me? (久野・高見 (2022: 52))

さらに、高橋 (2017, 2021) は、Can you 構文には伝達動詞が生じやすい一方で、Will you 構文には際立って生起する動詞が存在しないことを主張している。

本発表では、このような両構文に関する先行研究を踏まえつつ、両構文間で表される依頼内容の特徴に差異があるのかを、please が後続する Will/Can you 構文に生起する動詞の用法に着目する形で検証する。そして、安井・安井 (2022) で「丁寧な命令」を表すとされる Will you 構文には、あらかじめ取り決められていることの遂行を話し手が聞き手に要求する場合のように、実質的に命令を表す「指令的依頼」が多様に観察されることを示す。一方、Can you 構文には、話し手が直面している問題を解決するために聞き手に協力を求める場合のように、命令よりも指令力が弱い「非指令的依頼」が多様に見られることを主張する。

関係詞節における認識的 will について

岡麟太郎 (日本大学)

未来に言及する関係詞節内の認識的 will (「推量」の will) について、現在時制 (非モーダル文) との比較・対照を交え、その意味特徴を明らかにする。

(1) a. I'll try to get the autograph of the man who {speaks/will speak} at assembly tomorrow.

(Allen (1966: 178))

b. The man who {solves/will solve} this problem will receive a reward. (Declerck (2006: 545))

(1a) の speaks と will speak の違いは、「非モーダル文は話し手の確信を表わし、モーダル文は確信のなさを表わす」(cf. Lyons (1977: 807)) という意味原理により説明できる。しかし、(1b) の場合はそう単純ではない。(1b) で非モーダル (solves) が用いられても、話し手が「問題を解決する人物」を必ずしも確信しているわけではなく、またモーダル (will solve) が用いられても、「この問題を解決するであろう人物が報酬を得るであろう」という冗長な発話が意図されるわけではないからである。したがって、同じ「関係詞節における認識的 will の有無」という対比であっても、(1a) と (1b) では解釈の仕組みが異なる。本発表は、この違いを含め、関係詞節における現在時制と認識的 will の選択要因を「予測 (不) 可能性」の観点から統一的に説明する。

Used to の「推意キャンセル」と進行形可否に見られる整合性

島本慎一郎（日本大学）

used to は、過去の「習慣」や「状態」を現在と対比し、ふつう、「現在はそうではない」ことを表す。しかしながら、「習慣」や「状態」が現在も続く例、あるいは不明であることが示される例もまた散見される。

(1) a. I *used to* walk to my office, but now I take the bus. (江川 (1991³: 309))

b. Bill *used to* be a member of subversive organization, {and he still is / but I don't know whether or not he is now.} (Comrie (1976: 29))

これまで、used to の使用可否と used to が現在も続く「習慣」や「状態」を表す「推意キャンセル」の容認性は同義的に扱われてきたため、推意キャンセル文における「現在との対比」の有無や、推意キャンセルの可否基準は判然としないままである。

本発表では、意味の観点から、used to の推意キャンセルについて検討し、そのメカニズムを明らかにする。その結果、used to は「習慣」や「状態」がもつ「可変性」(changeability)の高低によって、推意キャンセルのしやすさが決まり、この可変性と進行形の意味特徴である「一時性」(temporariness)とのあいだには整合性が見られることを主張する。

第2室 (1号館5階151教室)

司会 徳永和博（東京農業大学）

動能構文における動作主の意図性

加藤翔太（筑波大学大学院）

本発表では、動能構文 (conative construction) と呼ばれる、本来他動詞として用いられる動詞が、直後に at や on といった前置詞を伴う構文を扱う。

(1) a. She cut the bread {in/*for} an hour.

b. She cut at the bread {*in/for} an hour. (Tenny (1994: 45))

in/for 句の文法性から、Vendler(1967)の動詞の4分類に基づく(1a)のような他動詞構文が到達 (accomplishment)、(1b)のような動能構文は活動 (activity)のアスペクトに属すると分析される。Pinker(1989)は「主語が斜格目的語 (oblique object) に対して影響を与えようとするが、それが成功しているかどうかは明らかでない」と述べており、Goldberg(1995)は、動能構文の意味は「XがYに行為を向ける (X DIRECTS ACTION AT Y)」ことであり、動詞はその行為によって意図された結果を示すと述べている。しかし、動作主の意図性がどの程度関与するかについては、直接的には論じられていない。本発表では、動能構文が非意図性を表す副詞と共起可能か、また消極的意志を伴う副詞も許容するのかをリサーチクエスチョンとして設定し、コーパス調査等を通じてこの問題を明らかにすることを目的とする。

談話標識の新奇表現 in long の語法

木村快（慶應義塾大学大学院）

本発表では、in long という新奇の談話標識を取り上げ、その特徴や、創発に至るプロセス、そしてその要因について、考察する。規範的には、英語に in long という表現は“ない”。しかし、in short と相関的に使用される in long の事例が、ウェブや SNS 上で実際に観察される。すでに定着している in short が「簡潔に言えば」と〈簡潔提示〉を行い、それに対応して、in long が「(より) 具体的に言えば」と〈詳細提示〉を行う談話の流れを導く (1)。さらに、SNS で顕著だが、short—long の対義関係をより前景化して、“言葉遊び” 的に in long を〈前言の強調〉として使用している事例も観察される (2)。

- (1) Part of the reason I couldn't wait for my Netflix DVD to come in the mail is because of my love of the heroine, Katniss. In short, as all of you know who have read the books, SHE IS AMAZING. In long, well, I believe there are parts of Katniss that's in all of us. She encompasses pieces of all of our souls that can be caring, heart wrenching, beautiful, sad, frustrating, and in the end, loving.

[GloWbE; 下線は引用者による]

- (2) In short, yes.

In long, yeeeeeeeeeeeeeeeeeeee

[X (旧 Twitter) での事例; 下線は引用者による]

不定詞を補文にとる使役表現とその補文内部における完了形・進行形の出現について

村岡宗一郎（日本大学）

現代英語の使役表現は、(1) のようにその不定詞補文に完了形や進行形をとることができないが (cf. Ross (1969: 81)、Goodman (1973: 84)、Zagona (1988: 50)、Takahashi (2012: 132)、Lapointe (1980: 772) や Takezawa (1984: 678) 等の先行研究は同等の例を適格文とする。Swan (2016: §109) も使役動詞 have の現在分詞補文が表す意味を ‘cause somebody to be doing something’ という表現を用いて説明している。

- (1) a. *They *made* her {*have cried* / *be crying*}.
b. *They *forced* her to {*have cried* / *be crying*}.

本発表では使役表現の不定詞補文内部における完了形と進行形の使用が許容される環境について考察を行い、当該の表現が否定文、主節動詞より未来を表す副詞句との共起、完全な操作性を表わす主語との共起、仮定法の伝播など特殊な環境にのみ許容されることを実証する。

シンポジウム (1 号館 4 階 141 教室) 15.35 – 17.45

テーマ 「英語へのコンストラクション (構文) 的アプローチ」

司会 前川貴史 (龍谷大学)

近年の英語研究において「コンストラクション (構文)」の概念が果たす役割は非常に大きい。しかし、これまでの研究においては、句や文における現象のみに焦点が当たることが多かった。それに対し本シンポジウムでは、句や文だけでなく、談話、そして日英比較という様々な観点において、コンストラクション的分析が有効であることを明らかにする。英語の様々なレベルにおける現象を観察し、それらのコンストラクション的特徴を分析することで、このアプローチのもつ可能性を追求すると同時に、英語の語法・文法が持つ多様性と奥深さへの理解を深めていきたい。このような試みによって、各種言語理論に対して新たな知見を導入することも期待できるであろう。

不定冠詞と複数形名詞が会合するとき

前川貴史 (龍谷大学)

英語の不定冠詞は通常、単数形可算名詞と共起し、複数形名詞とは組み合わせられない。(1a) の *a book* は問題ないが、(1b) のように名詞を複数形にすると、不定冠詞と複数形名詞との数の不一致により許容されない。

- (1) a. *a book* b. *(*a) books*

ところが、英語には次のような構造が存在する。

- (2) *a probable ten million lives* (F. Brown, *What Mad Universe?* p. 76)

不定冠詞が複数形名詞 (*lives*) と共起している点で (2) は特殊な構造であると言える。本論は英文法教育への示唆を視野に入れ、(2) の構造の特殊性、特に、不定冠詞の生起がどのように説明できるかを考察する。

一つの可能性として、複数をひとまとまりのものとして捉えて単数で表現する「複数の統合化」によって不定冠詞の生起を説明する方法が挙げられる (Jespersen (1954: 110ff))。しかし本発表では、この構造における不定冠詞は統合化とは切り離して考えるべきであることを主張する。不定冠詞は古英語の数詞／不定冠詞の複数形から発達したという歴史的背景に基づく説明が有効であると考えられる。

ネットワークを用いた構文分析 —BE V-en INF 構文を例に—

町田章（日本大学）

従来、受動文は能動文からの変形（統語規則による派生）として分析されてきた。しかしながら、(1) に示すように対応する能動文のない受動文が存在するという事実は、能動文から受動文が派生されるという分析に対して強力な反証データとなっている (Hilpert (2019:42))。

- (1) a. Kim is said to be a manic depressive.
b. *They say Kim to be a manic depressive. (H&P (2002: 1435))

また、知覚動詞や使役動詞の場合、以下に示すように、能動文を受動文に変形すると、派生前の能動文にはなかった要素である *to* が受動文では義務的に出現するという事実も知られている。これらの受動文を従来通り能動文からの派生と捉えた場合、なぜ能動文にはなかった要素 *to* が受動文には必ず出現するのかという更なる問いが生じてしまうことになる。

- (2) a. I saw him come out of the house.
b. He was seen to come out of the house. (江川 (1991: 270))

本研究では、構文文法、認知文法の枠組みを用いて、一連の「*be*+過去分詞+*to* 不定詞」形式は、それ自体、構文としての地位を確立しており、関係する複数の構文との関連で正しく理解されるべきであると主張する。

“So, look, I mean, you know, the fact is, is that ...” —語用論標識の連鎖と語法について—

柴崎礼士郎（明治大学）

語用論標識 (pragmatic markers, PMs) の研究は、20 世紀末以降飛躍的に発展している。研究の進展とともに包括用語も多様化し (e.g. Brinton 2017; Heine et al. 2021; Heine 2023; Fernández-Pena et al. 2025), PM 研究は新たな局面に突入したと判断できる。本発表は包括用語として PM を採用し、近年注目されている (1) のような PM 連鎖について (e.g. Koops & Lohmann 2013; Haselow 2019)、特に現代アメリカ英語のデータを用いて考察する。

- (1) BROWNSTEIN# So, look, I mean, you know, the fact is, is that there -- you know, as I said, in all likelihood, you will have ...

(2015 *CBS Face The Nation*; SPOK, COCA)

Heine (2023: 346–347) は、こうした連鎖は一度きりの使用に過ぎないと付言しているが、幾つかの PM 連鎖は繰り返し使用されていることが分かる。

本発表では *the fact is (that)* を軸として、先行する PM との連鎖を量的・質的に考察する。PM 連鎖はある程度の意味・機能の重複を示唆し、構文文法での「姉妹接点 (sister node)」を想起させる (cf. 前田 2025)。本発表は PM 連鎖の考察を通して、談話上で創発し続ける構文の実態を把握する試みである。

談話構文としての数・量推移構文

村尾治彦（熊本県立大学）

増減・繰り返し・継続を表す数・量推移構文は日英語間で (1) のような異なる構文選択を見せる傾向がある。(2) は (1a) の具体事例である。

- (1) a. 「NP が増加する・減少する」、「NP を増やす・減らす」
increase-ed/ ing + NP • decrease-ed/ ing + NP
b. 「NP を繰り返す」 c. 「NP が続く」
repeat-ed/ ing + NP continue-ed/ ing + NP
- (2) a. Increased control mechanisms won't solve that problem.
b. 規制の仕組みを増やしたとしても問題解決には至りません
(TCSE, Samantha Nutt: *The Real Harm of the Global Arms Trade* / サマンサ・ナット『武器貿易がもたらす真の害とは何か』下線は筆者)

日本語では、「NP が/を X する」のようなコト的な表現に、英語では対応する部分が分詞による修飾表現＋名詞のモノ的な表現になっている。

構文は談話の一部を構成するため、形式、意味、談話機能をパッケージングしたものと定義し、このような構文を扱うために本発表では、あらゆる構文を談話処理のパターンとみなす The Access-and-Activation Model (Langacker 2012b, etc.) に基づき、(1)、(2) のような構文の特性や機能を考察する。

英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正	安井 泉	内田聖二	
会長	吉良文孝			
事務局長	松原史典			
会計・名簿	小澤賢司			
会計監査	佐藤健児			
運営委員	五十嵐海理	大澤 舞	大竹芳夫	金澤俊吾
	吉良文孝	住吉 誠	出水孝典	中澤和夫
	西脇幸太	前川貴史	松原史典	村上まどか
	山岡 洋	山本 修	吉川裕介	吉田幸治
編集委員	大竹芳夫（編集委員長）			
	大橋 浩	大室剛志	金澤俊吾	吉良文孝
	須賀あゆみ	滝沢直宏	中澤和夫	中山 仁
	西田光一	野村忠央	林龍次郎	松村瑞子
	家口美智子	山岡 洋	吉田幸治	

発行日	2025 年 9 月 16 日
編集・発行	英語語法文法学会
代表者	吉良文孝
事務局	〒605-0927 京都市東山区渋谷通り東大路東入ル 3 丁目上馬町 544 京都女子大学文学部英語文化コミュニケーション学科 松原史典 研究室内 TEL : 075-531-9082（内線） FAX : 075-531-9120（代表） Email : segu.office@gmail.com URL : https://segu.sakura.ne.jp
振替口座	02260-0-70393 英語語法文法学会 © 英語語法文法学会